

◇学長表彰に係る学生の学業並びに研究活動等の功績

<個人>

【大阪公立大学】

氏名 Name	学部・学科 Faculty・Department 学域・学類 College・School 研究科 Graduate school	推薦理由・成績（功績の内容） Reasons for Recommendation	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会または国内大会 International competition or National competition ／（開催年月日 date）	その他参考事項 Others ※学術誌であれば、タイトルや大会の規模・概要などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.
岡崎 怜央	文学研究科	岡崎氏は2024年9月に熊本県教育委員会が実施する鞠智城跡「特別研究」事業に採用され、研究助成金の交付を受けた。2025年3月には研究成果を報告し、その内容は『鞠智城と古代社会』第13号に論文「城柵との比較からみた鞠智城の管理・経営体制」として掲載されている。また、同氏は『続日本紀研究』第440号に論文「宇多天皇の政務志向とその変遷」を発表した。掲載誌は日本古代史を中心とした論文が掲載される全国誌であり、厳正な査読を経て掲載されたものである。 このように岡崎氏は日本古代史にかかわる幅広いテーマで研究を展開し、その成果は全国規模で評価されている。		・鞠智城跡「特別研究」事業 2012年度以来、全国の歴史学や考古学の研究者を対象に公募され、採用者には研究助成金が交付される。将来有望な若手研究者を中心に採用されている。 ・『続日本紀研究』 創立70周年を迎えた続日本紀研究会が編集・刊行する全国的な学術誌。研究史上重要視されるような論文も数多く掲載されてきた。年4回の刊行。
鎌谷 祐里	文学研究科	鎌谷氏は信濃史学会フレッシュ論文に応募し、2025年1月「入賞」の連絡を受けた。鎌谷氏は、16～17世紀に信濃国を基盤に活躍した真田氏を卒業論文でとりあげ、それを改稿した論文を同学会の「フレッシュ論文」に申請し、「入賞」した。鎌谷氏は、受賞の結果、2025年6月8日（日）、松本市で開催された同学会定期総会において記念報告を行った。 このように鎌谷氏は、優れた卒論をもとに、その研究成果を認定されたものであり、学長表彰にあたいすると判断される。	信濃史学会 定期総会 2025年6月8日（日）松本市あがたの森文化会館 「信濃史学会フレッシュ論文 入賞」 *なお、修士論文をもとにした「特賞」は別の研究者が受賞している。	・信濃史学会は長野県を中心に活動している地方史学会。1932年に設立された老舗学会であり、地方史学会としては全国トップクラスと評価され、日本の地方史研究を牽引している。組織も全国規模の学会に匹敵し、機関誌『信濃』のレベルも高い。
中濱 大貴	文学研究科	中濱氏は、まず修士論文を改稿した論文「東西ドイツ統一における「文化条項」の策定と東ドイツ芸術家の貢献― 東ドイツ芸術家保護連合の活動に着目して ―」を歴史学分野の代表的な査読付き学術誌『史林』（史学研究会発行・京都大学大学院文学研究科内）に投稿し、同誌第108巻第5号（2025年9月）に掲載が決定した。 本論文は、東西ドイツの統一（1990年）の過程を、東ドイツ芸術家保護連合の活動の分析を通して再検討し、従来見られるような、西ドイツが東ドイツを一方向的に併合したという見解に対して、東ドイツ側の自発的な動きの重要性を指摘した画期的な研究である。 中濱氏はまた歴史家ワークショップ主催の第3回「ドイツ語でのリサーチショーケース」（2024年11月24日、東京大学）において、"Waren die Künstler der DDR 'die mangelnde Demokratietauglichkeit'? Die Transformation der DDR-Künstler und ihr Beitrag zur Wiedervereinigung"（東ドイツの芸術家は民主主義にとっての有用性が欠如しているか？ 東ドイツの芸術家の編成とその再統一への寄与）という報告をおこない、6名の報告者の中で「聴衆賞Der Publikspris」を獲得した。受賞者の人数は不明だが、こうした機会に積極的に挑戦する意欲は買いたい。	第3回「ドイツ語でのリサーチショーケース」（2024年11/24）	・学術誌『史林』 分野を問わない歴史学では『史学雑誌』『歴史学研究』『社会経済史学』と並び、年6回発行の査読付き学術雑誌であり、発行する史学研究会は京都大学大学院文学研究科に事務局が置かれている。会員総数は970名である。 ・歴史家ワークショップ 2016年から日本の歴史研究の国際発信のために外国のプレゼンの機会の提供や外国の学術誌への投稿を後押しするために積極的、かつ多面的に活動している組織である。

多田 向日葵	文学研究科	多田氏は、まず修士論文を改稿した論文「第一次世界大戦初期のドイツにおける大量屠殺措置『豚殺し』の言説分析」を歴史学分野の代表的な査読付き学術誌『史林』（史学研究会発行・京都大学大学院文学研究科内）に投稿し、同誌第108巻第4号（2025年7月）に掲載が決定した。 本論文は、第1次世界大戦中に行われた豚の大量処分「豚殺し」について、それを当時の十分な検討や理解を伴わないエピソードとして扱う従来の研究に対して、当時の関連史料の精査により、この事態をめぐる当時の人々の思惑や反響を解明し、さらにそこから大戦中の食糧政策の転換を見通した優れた研究である。第1次世界大戦の歴史的な意義について、具体的なプロセスから考える手掛かりを与えたものと評価できる。		・学術誌『史林』 分野を問わない歴史学では『史学雑誌』『歴史学研究』『社会経済史学』と並ぶ、年6回発行の査読付き学術雑誌であり、発行する史学研究会は京都大学大学院文学研究科に事務局が置かれている。会員総数は970名である。
高見 武弥	情報学研究科	右記の学会において行った発表が優れた内容であると評価を受け「ポスター賞」を受賞した。 ・（標題）「電子カルテと異なるベンダの重症系部門システム導入が看護業務に及ぼす影響-システム用上の課題報告に基づいた内容分析- ・（内容）異なるベンダのシステム連携という医療現場での喫緊の課題に対し、看護業務への影響を現場報告に基づく質的内容分析を通して明らかにした。特に、情報学的な観点から、システム運用に関する課題の構造的な把握と、実践的な示唆を導出した点が特徴。 ・（評価を受けた点）本賞は、研究の目的の明確さ、学術的な新規性・発展性、抄録原稿の完成度に優れた演題に贈られるものであり、本演題はそれらに加え、看護現場の視点を重視しながらシステム運用上の課題を構造的に捉え、現場の実践知に基づく具体的かつ実用的な示唆を提示した点においても高く評価された。	第26回日本医療情報学会看護学術大会 (2025/6/27-28)	【大会概要】日本医療情報学会の一部門として、独自に発展し医療機関・大学・企業など多様な立場から、情報技術を活用した看護の質向上や業務支援、記録システムに関する最新の研究成果が発表・議論される全国規模の学術大会。（前身は看護情報システム研究会（1986～1999）） 【今回の参加者数等】 参加者数：1,000人以上 発表数：109件（うち口演77件、ポスター32件） 受賞者数：4名、うちポスター賞1名
福田 瑛吾	理学研究科	右記の国際学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「TERPNET 2025 EMCR Travel Award」を受賞した（添付資料1）。 ・標題「Chemo-enzymatic Synthesis of Halogen-containing Terpene Analogues」 ・内容 ハロゲン含有テルペンアナログをテルペン合成酵素を用いて合成した初の例をを発表した ・評価を受けた点 合理的な基質設計に基づいて、テルペン合成酵素が通常基質としないハロゲン含有基質を反応させ、人工的なハロゲン含有化合物を合成した点が高く評価された。 ・あわせてテルペン類に関する関連研究成果が国際誌に受理・掲載された（添付資料2）。	TERPNET 2025	【大会概要】 2年に1回、テルペン化合物に関する国際学会であり、本年はオーストラリアブリスベンにて開催された。Nature, Scienceに論文を掲載している世界トップクラスの招待講演とともに、ヨーロッパ、アジア、米国、オーストラリア各国の研究者らによるポスター発表が行われた。EMCR Travel Awardは優れた研究発表を行った若手発表者に送られるもので、受賞者は学会と並行して行われる若手によるワークショップに招待された。 【規模】 参加者数：200人 発表数：70件（ポスター発表含む） 受賞者数：6名
溝口 史華	理学研究科	学術論文 Nilpotent Lie algebras obtained by quivers and Ricci solitons が、国際学術誌 Advances in Mathematics に掲載された（Voleme 480 (2025), Page 110464） https://doi.org/10.1016/j.aim.2025.110464 多くの国際研究集会で研究発表を行い、特に右記の学会における発表は優れた内容であると評価を受け「Award for Young Mathematicians」を受賞した。	The 18th Graduate Student Workshop on Mathematics (2025/7/28-8/1)	Advances in Mathematics は、純粋数学分野を代表する国際学術誌である。 Scopusによると数学分野では Q1（84パーセンタイル）に位置する雑誌で、大学院生の論文が掲載されたことは快挙といえる。 受賞は、慶北大学校（韓国）で開催された24名の数学の大学院学生による研究発表の場で、特に優れた発表者4名に対して贈られたものである。

甲斐 涼哉	理学研究科	学術論文 On the quandles of isometries of the hyperbolic 3-space （単著）が、国際学術誌 Geometriae Dedicata の219 号に掲載された。 https://doi.org/10.1007/s10711-025-00994-8 学術論文 On the Euler characteristics for quandles （Hiroshi Tamaru氏との共著）が、国際学術誌 International Journal of Mathematics に受理（掲載決定）された。 https://doi.org/10.1142/S0129167X2550034X	受賞：Award for Young Mathematicians/「The 18th Graduate Student Workshop on Mathematics」において/2025年7月29日-8月1日開催	単著の掲載された Geometriae Dedicata は幾何系分野で質の高い論文が掲載される重要な専門誌の一つである。また、共著論文の掲載が決定している International Journal of Mathematics は純粋数学における総合誌である。 受賞は、慶北大学校（韓国）で開催された24名の数学の大学院学生による研究発表の場で特に優れた発表者4名に対して贈られたものである。 以上のように、数学分野における大学院学生として非常に優れた研究および研究発表（受賞）の実績がある。
井上 諒一	理学研究科	筆頭著者として、国際学術雑誌であるHydrobiologiaに論文を発表した。 右記の国際学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「The Poster Presentation Award」を受賞した。 発表演題：Monogamous Tanganyikan cichlid with biparental offspring use vocal signals to maintain social bonds: novel evidence of fish vocal communications? 内容：野外潜水調査により、魚類の繁殖ペアが異なる場面において、異なる鳴音を発することを行動観察も含め証明した論文である。 評価を受けた点：魚類の繁殖ペアが複数の鳴音を異なる場面で発することを示した研究は初めてであり、鳴音を用いて魚類がコミュニケーションを行っている可能性を示す重要な成果として高く評価された。	東アジア生態学連合(EAFES)第11回大会) / (2025/7/19-22、東京)	【論文】 著者: Inoue R., Morita M, Awata S, Satoh S タイトル: Behavioral sequences during courtship and territorial defense of male <i>Benthochromis horii</i> cichlids in Lake Tanganyika. 掲載雑誌: Hydrobiologia, 852, 3885-3894 【国際学会の概要】 東アジアにおける国際生態学研究集会 【規模】参加者数：400人 発表数：合計28分野で372件（ポスター発表213件、口頭発表159件） 受賞者数：ポスター発表25名
加藤 拓磨	理学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Poster Award」を受賞した。 ・ 標題 「Comparison of ecological characteristicsbetween dioecious and cosexual species of Japanese <i>Acer</i> species」 ・ 内容：日本のカエデ属全種の分子系統樹を作成し、雌雄異株性の進化に重要な要因を明らかにした。 ・ 評価を受けた点：これまで困難だったカエデ属の分子系統を推定した点、これにより雌雄異株性（雄雌のある植物）が花粉媒介者の不足する地域で促進されたという仮説を提唱したことが高く評価された。	11th East Asian Federation of Ecological Societies (EAFES) International Congress/ (2025/7/19-22)	【大会概要】 EAFES：2年に1回行われる、東アジア（日本・中国・韓国）の研究者による生態学分野の国際学会 【規模】 参加者数：約500人 発表数：約400件（内ポスター賞対象106件） 受賞者数：25名(Best Poster Award 4名、Poster Award 21名)
瓦谷 丈琉	理学研究科	右記の2学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Poster Award（EAFES）」「優秀発表賞（JASTE）」を受賞した。 ・ 標題 EAFES「Interspecific hybridization and microhabitat niche shift in sympatric <i>Ixora</i> species: A mechanism for increasing species diversity in Bornean rainforest」 JASTE「ランビル国立公園に同所的共存する<i>Ixora</i>属の種間交雑とマイクロハビタットニッチシフト」 ・ 内容（共通）：熱帯樹木のサンタンカ属で過去に近縁種間の交雑があったことを遺伝子解析で検証した。また、交雑で他種の遺伝子を取り込んだ種の生育環境が他種とは大きく異なっていることを明らかにした。 ・ 評価を受けた点：熱帯雨林の樹木で種間交雑が起きることを検証した点、さらに、種間交雑が熱帯樹木のニッチ分割を促進し、多種の共存と種多様性維持に貢献する可能性があることを示した点が高く評価された。	1) 11th East Asian Federation of Ecological Societies (EAFES) International Congress/ (2025/7/19-22) 2) 第35回 日本熱帯生態学会(JASTE)年次大会 / (2025/6/28-29)	【大会概要】 1) EAFES：2年に1回行われる、東アジア（日本・中国・韓国）の研究者による生態学分野の国際学会 2) JASTE：年に1回行われる、熱帯生態学分野の全国規模の学会 【規模】 1) EAFES：参加者数：約500人、発表数：約400件（内ポスター賞対象106件）、受賞者数：25名(Best Poster Award 4名、Poster Award 21名) 2) JASTE：参加者数：約150人、発表数：約100件（ポスター発表含む）、受賞者数：6名(若手研究者)

小林 優也	理学研究科	筆頭著者として、国際学術雑誌であるScientific ReportsとBiogeographyに論文をそれぞれ1報発表した。また、共著者として国際学術雑誌であるScientific Reportsにも1報発表した。Scientific Reportsに発表した2報については、プレスリリースを行い、それぞれ96 Altmetric 3839 access、39 Altmetric 1192 accessを獲得しており大きな反響があった。		著者: Kobayashi Y , Kondo Y, Kohda M, Awata S タイトル: Active provisioning of food to host sea anemones by anemonefish. 掲載雑誌: Scientific Reports 15: 4115 著者: Kobayashi Y , Awata S タイトル: Is anemonefish also a cleaner? First report of cleaning behavior in a juvenile Clark's Anemonefish <i>Amphiprion clarkii</i> . 掲載雑誌: Biogeography 27: 20–24 著者: Kondo Y, Kobayashi R, Kobayashi Y , Awata S タイトル: Temporal dynamics of courtship and spawning in medaka under laboratory conditions revealed by 24 h video monitoring. 掲載雑誌: Scientific Reports 15: 26576
小林 龍太郎	理学研究科	筆頭著者として、国際学術雑誌であるIchthyological Researchに論文を1報発表した。また、共著者として国際学術雑誌であるScientific Reportsにも1報発表した。Scientific Reportsに発表した論文については、プレスリリースを行い、39 Altmetric 1192 accessを獲得しており大きな反響があった。博士2年前期にも関わらず、すでに筆頭著者として論文を報告しているのは高く評価できる。		著者: Kobayashi R , Satoh S タイトル: Decision-making process of biting in lesser moray eel (<i>Gymnothorax minor</i>): the primacy of tactile stimuli. 掲載雑誌: Ichthyological Research https://doi.org/10.1007/s10228-025-01013-2 著者: Kondo Y, Kobayashi R , Kobayashi Y, Awata S タイトル: Temporal dynamics of courtship and spawning in medaka under laboratory conditions revealed by 24 h video monitoring. 掲載雑誌: Scientific Reports 15: 26576
日高 諒	理学研究科	右記の国際学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「The Poster Presentation Award」を受賞した。 発表演題：Dominant breeders punish idle helpers depending on group size and spatial proximity in a cooperatively breeding cichlid fish: First evidence in non-human animals. 内容：野外潜水調査により、魚類が罰を用いていること、罰が発生する状況が群れサイズや個体との近接度合いによって変化することを明らかにした研究である。 評価を受けた点：ヒト以外の動物で罰の存在を証明した数少ない研究であること、また、ヒト以外で罰が発生する状況を複数の要因を検討して初めて示した研究であることが高く評価された。	東アジア生態学連合(EAFES)第11回大会) / (2025/7/19-22、東京)	【国際学会の概要】 東アジアにおける国際生態学研究集会 【規模】参加者数：400人 発表数：合計28分野で372件（ポスター発表213件、口頭発表159件） 受賞者数：ポスター発表25名
伊藤 琉太	理学研究科	① 物理学分野で著名な日本物理学会の学術誌（JPSJ）に論文が掲載された。 ② 日本流体力学会年会2024で口頭発表を行った。 ・ 標題「混相量子流体の相分離過程における渦度相関の階層性と動的スケーリング」 ③ 日本物理学会春季大会で口頭発表を行った。 ・ 標題「相分離する2成分超流体における渦度の動的スケーリング」 ④ スペインで開催された低温物理学に関する国際会議（LT30）でポスター発表を行った。 ・ 標題 "Dynamic scaling of vorticity in phase separation of superfluid mixtures"	② 日本流体力学会年会2024 (2024/9/25-27) ③ 日本物理学会春季大会 (2025/3/18-21) ④ 低温物理学に関する国際会議（LT30） (2025/8/6-8/13)	① Ryuta Ito, Hiromitsu Takeuchi, "Dynamic Scaling of Vorticity in Phase-separating Superfluid Mixtures", Journal of the Physical Society of Japan 94, 073603 (2025) ② 【大会概要】年に1回、流体力学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会である。 【規模】参加者：約500名、発表数：約300件 ③ 【大会概要】年に1回、物理学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会である。 【規模】参加者：約5,000名、発表数：約3,500件 ④ 【大会概要】数年に1回、低温物理学分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際規模の学会である。 【規模】参加者：約1,100名、発表数：約1,000件

米田 壮汰	理学研究科	①日本流体力学会年会2024で口頭発表を行った。 ・ 標題「超流動伴流に対するPOD解析の適用」 ②日本物理学会2025年春季大会で口頭発表を行った。 ・ 標題「超流動伴流に対するPOD法の適用」 ③国内の学術誌(JPSJ)へ論文が掲載された。 ④オーストラリア・クイーンズランド大学の研究グループから③の論文についてセミナーを依頼され英語で口頭発表（遠隔）を行った。 ⑤国際会議LT30でポスター発表を行った。 ・ 標題「Application of POD analysis to superfluid wake systems」	①日本流体力学会 年会2024 (2024/9/25~27) ②日本物理学会 2025年春季大会 (2025/3/18~21) ③30th International Conference on Low Temperature Physics (2025/8/7~13)	①【大会概要】年に1回開催される流体力学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会 【規模】参加者：約500人、発表数：約300件 ②【大会概要】年に2回開催される物理学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会 【規模】参加者：約5,000人、発表数：約3,500件 ③Sota Yoneda, Hiromitsu Takeuchi, "Proper Orthogonal Decomposition of a Superfluid Turbulent Wake", J. Phys. Soc. Jpn. 94, 073601 (2025) ⑤【大会概要】数年に1回開催される低温物理に関する国際会議 【規模】参加者：約1,100人、発表数：約1,000件
大崎 歩乃花	工学研究科	査読付き英文学術誌において論文が掲載された（申請者が筆頭著者として論文の執筆）。 低レイノルズ数流れにおいてボルテックスジェネレータが空力性能向上に役立つことを示した。 論文題目：The Effects of Installing Protuberances on a Flat Plate at Low Reynolds Numbers 著者：大崎歩乃花, 佐々木大輔, 川本裕樹, 岡本正人 掲載誌：International Journal of Computational Fluid Dynamics 巻・号：Vol. 38, Issue 6-7 ページ：488-506 年月：July 2025 https://doi.org/10.1080/10618562.2025.2508349		論文題目：The Effects of Installing Protuberances on a Flat Plate at Low Reynolds Numbers 著者：Honoka Osaki, Daisuke Sasaki, Yuki Kawamoto, Masato Okamoto 掲載誌：International Journal of Computational Fluid Dynamics 巻・号：Vol. 38, Issue 6-7 ページ：488-506 年月：July 2025 https://doi.org/10.1080/10618562.2025.2508349 論文概要：本研究では、低レイノルズ数の流れ場において、微小突起（ボルテックスジェネレータ）を付けたことによる空力性能への影響について、数値流体解析を用いて調査を行った。 レベルセット関数を用いて上面に半円形の突起を設けた平板を定義し、突起の大きさ・位置・個数を変化させた場合の空力性能と流れ場への影響を評価した。 その結果、突起を設けることで生成した剥離渦が空力性能の向上に貢献することが明らかとなった。 論文を添付
吉岡 舜	工学研究科	下記の主著および責任著者論文が、海洋工学分野のtop10%学術誌に掲載された。 ・ 表題：Explainable AI for ship collision avoidance: Decoding decision-making processes and behavioral intentions ・ 学術誌：Applied Ocean Research ・ 掲載日：2025/02/21（オンライン）、2025年5月（雑誌） ・ 内容：深層強化学習ベースの自律操船アルゴリズムの課題であるブラックボックス性の問題に対して、判断根拠や行動意図を定量化できる避航操船AIモデルを提案し、数値シミュレーションによりその有効性を示した。 ・ 評価された点：AIの説明可能性は実用化に向けた大きな課題とされており、避航操船などの判断ミスが人命損失に関わるタスクでは特に重要とされてきた。その問題に対して、AIの判断根拠や行動意図を説明可能なAIモデルを提案し、その新規性・実用性が評価され、掲載に至った。		DOI: 10.1016/j.apor.2025.104471 日本語プレスリリース： https://www.omu.ac.jp/info/research_news/entry-16653.html 英語プレスリリース： https://www.omu.ac.jp/en/info/research-news/entry-81306.html Applied Ocean Research(Q1 journal in Ocean Engineering) ・ Impact Factor (IF)：4.4 ・ CiteScore：8.9(Ocean Engineering分野114誌中8位) ・ トップ10%ジャーナル Scopus Preview調べ

加藤 匠真	工学研究科	業績: 申請者が第一著者の以下の論文が査読付き論文誌に掲載された（2025年3月号に掲載）。 本論文で得られた知見は，結石破砕や超音波治療におけるキャビテーション気泡の役割を理解する上で有用である。 論文名：水-アガロース境界内外におけるレーザ誘起気泡の力学 著者：加藤 匠真, 松倉 知哉, 高比良 裕之 雑誌名：混相流, Vol. 39, No. 1 (2025), pp. 53-60, doi.org/10.3811/jjmf.2025.003	「混相流」 （日本混相流学会論文集） https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjmf/39/1/39_2025.003/_article/-char/ja	加藤匠真，松倉知哉，高比良裕之，水-アガロース境界内外におけるレーザ誘起気泡の力学，混相流, Vol. 39, No. 1 (2025), pp. 53-60, doi.org/10.3811/jjmf.2025.003 論文概要：種々のヤング率のアガロースゲルを用いて，水－アガロース境界近傍の水中またはアガロース中にレーザ誘起気泡を生成し，気泡の成長崩壊形状，振動周期ならびに並進移動特性を調査した．その結果，気泡が水－アガロース界面を跨いで成長崩壊する際，アガロース側の気泡部分の成長が抑制され，アガロース側の気泡部分の体積と水側の気泡体積の時間履歴の間に位相差が生じるなどの知見を得た． エヴィデンス： ・論文原稿
張 博雲	工学研究科	国際学術ジャーナルEnergyに研究論文が掲載された。 論文題目：A near-optimal solution method for year-round operational planning of energy supply-storage systems utilizing time-domain decomposition 著者：Boyun Zhang, Tetsuya Wakui 掲載雑誌：Energy 出版社：Elsevier 国際学術ジャーナルEnergyに研究論文が掲載された。 論文題目：Optimal design of energy storage-supply systems using a multi-objective evolutionary algorithm and mixed-integer linear programming with a two-stage rolling horizon method 著者：Boyun Zhang, Tetsuya Wakui, Shunta Aoji 掲載雑誌：Energy 出版社：Elsevier		国際学術ジャーナルEnergyは、ASJC分類で"Energy Engineering and Power Technology", "Modeling and Simulation", "Mechanical Engineering", "Electrical and Electronic Engineering"などの分野でTop10％にランキングされるTopジャーナルです。 Top5％以内のジャーナルであることから，本学からAPC支援制度が適用され，オープンアクセス論文として出版しました。 https://doi.org/10.1016/j.energy.2025.137358 国際学術ジャーナルEnergyは、ASJC分類で"Energy Engineering and Power Technology", "Modeling and Simulation", "Mechanical Engineering", "Electrical and Electronic Engineering"などの分野でTop10％にランキングされるTopジャーナルです。 Top5％以内のジャーナルであることから，本学からAPC支援制度が適用され，オープンアクセス論文として出版しました。 https://doi.org/10.1016/j.energy.2025.137970
馬場 夏希	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容とプレゼンテーションであると評価を受け「Best Poster Presentation Award」を受賞した。 ・ 標題「Year-round coordinated operation planning of power-to-gas plant and microgrid based on mixed-integer linear model」	International Workshop on Environmental Engineering 2025 (IWEE2025)/（2025/7/18～7/21）	【大会概要】 3年に1回、産官学を問わず、環境工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際シンポジウムです。 【規模】 参加者数：196人 発表数：118件（ポスター発表含む） 受賞者数：3名
林 秀汰	工学研究科	申請者が第一著者の以下の論文が査読付き論文誌に掲載された（2025年3月号に掲載）。 本論文で得られた実験結果は，気泡流の構造を把握する上で有用な知見を与えるものである。 論文名：斜め平板下における上昇気泡群の構造に及ぼす気泡発生頻度と上昇距離の影響 著者：林 秀汰, 松崎 健太郎, 小笠原 紀行, 高比良 裕之 雑誌名：混相流, Vol. 39, No. 1 (2025), pp. 72-80, doi.org/10.3811/jjmf.2025.005	「混相流」 （日本混相流学会論文集） https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjmf/39/1/39_2025.005/_article/-char/ja	林秀汰，松崎健太郎，小笠原紀行，高比良裕之，斜め平板下における上昇気泡群の構造に及ぼす気泡発生頻度と上昇距離の影響，混相流, Vol. 39, No. 1 (2025), pp. 72-80, doi.org/10.3811/jjmf.2025.005 概要：斜め平板下を上昇する少数の球形気泡群を対象とし，気泡の発生頻度と上昇距離が気泡クラスタの構造に与える影響や，各条件間における相関に関する調査を行い，気泡の発生頻度が同程度の場合には，気泡の上昇距離が長くなるにつれて横並びの配置をとる気泡組の割合が増加し，気泡クラスタの発達が促進される等の知見を得た。 エヴィデンス： ・論文原稿

加藤 颯	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「プレゼンテーション賞」を受賞した。 ・ 標題「酸化還元滴定を用いた飛灰混合液の酸化還元特性の把握」 ・ 内容：廃棄物焼却飛灰の溶出液の還元力を把握するための酸化還元滴定操作に置いて、誤差を抑えるための実験的検討を行い、再現性の高い手法を確立できた。 ・ 評価を受けた点 → 焼却灰溶出液の酸化還元特性に着目した点が新しいこと、細かな実験手順の改善によって測定値のばらつきを抑えられたこと、プレゼンが理路整然としていて分かりやすかったこと、などが評価された。	第24回環境技術学会年次大会/2024年9月25日	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、環境技術分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：約120人 発表数：60件（誌上発表4件含む） 受賞者数：プレゼンテーション賞4名 など
山崎 滉太	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀論文発表賞」を受賞した。 ・ 標題「生細胞光毒性評価のためのプラズモン基板の作製と加熱処理による散乱増大効果」 ・ 内容：生細胞光毒性評価への応用を目的に、電子線描画と金属蒸着により周期的な銀ナノディスク構造を作製した、作製したナノ構造の消衰スペクトル、散乱スペクトル、形状の加熱温度依存性を詳細に調べることにより、加熱処理による形状変化と結晶性の向上を積極的に利用することにより、共鳴波長のチューニングと散乱強度の増強が得られることを示した、 ・ 評価を受けた点：加熱処理という非常に簡易な手法により共鳴波長のチューニングと同時に発光増強度の向上が可能であることを示した点、	レーザー学会学術講演会第45回年次大会/ (2025/1/21~23)	【大会概要】 レーザー学会が主催する学術講演会で、年に1回、産官学を問わず、光・レーザーに関する最新の研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。例年約800名の研究者が参加し、約500件の発表が行われます。 【規模】第45回年次大会 参加者数：約800人 講演件数：約480件 受賞者数：優秀論文発表賞9名
井上 颯太	工学研究科	全国規模の学術誌に論文が掲載許可された [論文のタイトル] Evaluation of analog memory characteristics using HfO₂-based ferroelectric thin films DOI:10.35848/1347-4065/adf85c [内容] ニューロモルフィックデバイス応用に向けて、Hf_{0.5}Zr_{0.5}O₂（HZO）強誘電体薄膜のアナログメモリ特性を評価した。その結果、分極反転の完全性と記憶保持特性との間に最適化すべき重要な領域が存在することを明らかにした。本成果は、HZOを用いたニューロモルフィックデバイスにおいて、パターン認識能力を向上させるための有効な設計指針を提供するものである。	Japanese Journal of Applied Physics 64, 08SP20 (2025) Accepted：5 August Published：28 August	{学術誌の概要} Japanese Journal of Applied Physics 1962年7月に日本で創刊された日本の学術誌で、査読された論文のみ掲載される。日本から発信される英文での応用物理学分野における総合学術誌である。
岡田 淳之	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Student award」を受賞した。 ・ 標題「A dual TSP signal design for fast and accurate acquisition of complex impedance spectra in organic devices」 ・ 有機デバイスの複素インピーダンススペクトルの高速、高精度測定を目的として、多数の周波数スペクトルを含む時間的に引き延ばされたパルス（TSP：Time-streched pulse）を2つ組み合わせた新しい手法(Dual TSP)を提案した。提案した手法は1つのTSPを用いた従来手法に比べ、振幅変動が抑制され、より雑音耐性のある手法であることを数値的に示した、 ・ 評価を受けた点：Dual TSP信号を用いた非常に雑音耐性の高い手法を新しく提案し、信号の最適設計や従来法との比較による新手法の数値的な評価を行った点、	The 10th International Symposium on Organic and Inorganic Electronic Materials and Related Nanotechnologies（EM-NANO）2025 (2025/6/11-14)	【大会概要】 有機・無機エレクトロニクス材料とナノテクノロジーに関する国際シンポジウムです。4日間にわたり開催され、全体講演（Plenary lectures）や招待講演、特別セッションのほか、開催10回目を記念する式典も行われました。 【規模】 発表数：口頭約80件、ポスター約200件 受賞者数：口頭3名、ポスター1名、StudentAward9名
西村 恵	工学研究科	国際会議において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Student Travel Grant Award」を受賞した。 [発表タイトル] Neuromorphic Sensing for Alternating Current Using Piezoelectric Resonator [内容] 本発表では、圧電共振型電流センサを用いたインセンサリザパーコンピューティングによる電流波形パターン分類を実施し、単純なパターンの高精度な分類ができたことを報告した。	IEEE ISAF 2025（2025 IEEE International Symposium on Applications of Ferroelectrics） 開催地：オーストリア・グラーツ 2025年7月13日-18日	【国際会議概要】 年に1回開催される、強誘電体に関する研究の最先端を切り拓いてきた国際会議です。世界中の研究者が参加し、材料からデバイス応用まで幅広いテーマが扱われます。 【規模】 参加者数：515名 発表数：482件 受賞者数：74名 https://2025.ieee-isaf.org/

藤原 輝羅	工学研究科	全国規模の学術誌に論文が掲載された [論文のタイトル] Wireless power transfer application of piezoelectric resonators using BiFeO ₃ epitaxial films DOI:10.35848/1347-4065/adf077 [内容] ペースメーカーのような埋込型医用デバイスは電源交換が課題である。そこで本研究では交番磁界と圧電効果を利用した無線給電法に注目した。非鉛材料であるBiFeO ₃ 薄膜を用いた圧電MEMS振動子を作製し、その無線給電性能を評価を行った。	Japanese Journal of Applied Physics, 64, 08SP01 (2025) Published : 4 August 2025	{学術誌の概要} Japanese Journal of Applied Physics 1962年7月に日本で創刊された日本の学術誌で、査読された論文のみ掲載される。日本から発信される英文での応用物理学分野における総合学術誌である。
村上 悠太	工学研究科	ロボット関連の国際学術論文誌Robomech JournalにRKT-GNSSに関する研究"Wrong FIX detection of RTK-GNSS positioning using the 3D point cloud of surrounding environment"が採録された。Springer Nature にてOpen Accessで2025年7月26日より論文が公開されている。		OpenAccessのリンク https://rdcu.be/ex0k0
安井 佐裕未	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・ 標題「リン酸基含有 RAFT 剤を用いた酸化チタン／ポリマーノコンポジットの開発と超音波力学療法への応用」 ・ 内容：リン酸基を含むRAFT剤を用いて合成した高分子を酸化チタン表面へ修飾することに成功し、このポリマー／酸化チタンノ粒子複合体を超音波力学療法への応用に成功した。 ・ 評価を受けた点：優れたポスター発表を行ったことが評価された。	日本接着学会 若手交流シンポジウム2025 (2025/6/29)	【大会概要】 高分子化学・界面化学・接着科学に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の若手研究者中心の国内会議です。 【規模】 参加者数：100人 発表数：50件（ポスター発表含む） 優秀ポスター受賞者数：全体の約20%
谷内 勇太	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・ 標題「がん細胞選択的に結合しTurn-on型蛍光発光を示す機能性高分子の合成」 ・ 内容：がん細胞の早期発見に資する、がん細胞に高発現する糖鎖構造に応答してTurn-on型蛍光発光特性を示す新規水溶性・機能性高分子を合成することに成功した。 ・ 評価を受けた点：優れたポスター発表を行ったことが評価された。	第63回日本接着学会年次大会 (2025/6/30-7/1)	【大会概要】 高分子化学・界面化学・接着科学に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の国内学会です。 【規模】 参加者数：600人 発表数：150件（ポスター発表含む） 優秀ポスター受賞者数：全体の約10%
長岡 朋希	工学研究科	右記の化学全般に関にする国際学術誌に論文が掲載された。	—	・ 書誌情報：Nagaoka, T.; Matsui, Y.; Ogaki, T.;Naito, H.; Ikeda, H. Asian J. Org. Chem. 2025, 14, e00510. (DOI: 10.1002/ajoc.202500510) ・ タイトル：Conformation-DependentLuminescenceandThermalPhase TransitionofCrystalsofaTetrahydropentaleneDerivative BearingAromaticRingswithFrustratedFreeRotation ・ オンライン掲載日：2025年6月19日 ・ インパクトファクター：2.7， 出版社：WILEY
板垣 賢広	工学研究科	右記の研究誌に論文が、優れた内容であると評価を受け掲載されました。 研究題目：Design of skin-permeable organic–inorganic hybrid nanoparticles doi.org/10.1007/s44211-025-00823-8	Analytical Sciences, (July, 16, 2025)	【概要】国際学術論文誌 Analytical Sciencesに掲載
富士 海斗	工学研究科	被推薦者が第一著者となった学術論文が、American Chemical Society のACS Applied Polymer Materials誌に掲載された。 ・ 標題「Miniemulsion Ring-Opening Radical Polymerization with Dibenzo[c,e]oxepan-5-thione for Degradable Polymer Particles」 ・ 著者「Kaito Fuji, Yukiya Kitayama, Atsushi Harada」 ・ 内容：環境調和型媒体であるミニエマルション重合において、Dibenzo[c,e]oxepan-5-thioneのラジカル開環重合に成功し、アミンにより主鎖分解が可能な高分子微粒子の合成に成功した。		【学術論文概要】 Miniemulsion Ring-Opening Radical Polymerization with Dibenzo[c,e]oxepan-5-thione for Degradable Polymer Particles Kaito Fuji, Yukiya Kitayama, Atsushi Harada ACS Applied Polymer Materials 7(5) 3349-3357 2025 DOI:10.1021/acsapm.5c00088

和田 佳成太	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・ 標題：時間分解 ESR による高歪みかご形化合物ラジカルカチオンのSOMO–HOMO逆転の実証 ・ 内容：高歪みかご形化合物ラジカルカチオンの半占軌道が最高被占軌道よりも深いこと（SOMO–HOMO逆転，SHI）を時間分解ESR測定などを用いて実証した。 ・ 評価を受けた点：SHIラジカルカチオンの設計指針および，時間分解ESR測定を用いたSHIの実証方法が新規かつ応用範囲が広いことを，わかりやすく伝えられた点。	第 28 回 ESRフォーラム研究会（2025/7/19）	・ 大会概要：ESRに興味がある人なら誰でも参加できる「できるだけ敷居の低い ESRの研究会」を目指してはじめられた研究会。 ・ 規模 参加者数：約50人 発表数(ポスター発表)：16件 優秀ポスター賞受賞者数：3名
藤田 侑志	工学研究科	・ 右記の論文が国際的学術誌『Batteries & Supercaps』に掲載された。 『Batteries & Supercaps』は、Wiley-VCH Verlag(ドイツ)が発行する電気化学的エネルギー貯蔵に関する国際的なピアレビュー付き学術誌である。 ・ 右記の論文が国際的学術誌『ACS Applied Energy Materials』に掲載された。 『ACS Applied Energy Materials』は、アメリカ化学会(ACS)が発行する査読付き国際的学術誌で、エネルギー関連材料の研究を中心に扱っている。		【論文詳細】 "Efficient Ion Diffusion and Stable Interphases for Designing Li ₂ -S-Based Positive Electrodes of All-Solid-State Li/S Batteries" Y. Fujita, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi Batteries & Supercaps, 00, e202500274, 1-10 (2025). https://doi.org/10.1002/batt.202500274 <u>Published: May 21</u> 【論文詳細】 "Amorphous Sulfide Solid Electrolytes Based on Na3PS4-NaxMOy(M=P and S) for All-Solid-State Sodium Batteries" Y. Fujita, R. Yamanaka, D. Suehiro, K. Imai, K. Koga, T. Asakura, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi ACS Appl. Energy Mater. 8, 8216-8223 (2025). https://doi.org/10.1021/acsaem.5c00748 Accepted: May 29, Published: June 5
今井 奎太朗	工学研究科	右記の論文が国際的学術誌『Journal of Power Sources』にアクセプト(Online Published)された。 『Journal of Power Sources』は、エルゼビア社が発行する査読付き国際的学術誌で、電気化学的エネルギー変換に関する論文を対象としている。		【論文詳細】 "Electrochemical Properties of All-Solid-State Lithium Batteries with Amorphous MoS ₄ Electrodes Prepared by the thermal Decomposition of (NH ₄) ₂ [Mo ₃ S(S ₂) ₆]・2H ₂ O" K. Imai, T. Shigedomi, T. Furukawa, C. Hotehama, H. Kowada, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi J. Power Sources, 653 (237735) 1-7 (2025). https://doi.org/10.1016/j.jpowsour.2025.237735 <u>Accepted: Jun.19, Published online: Jul 3</u>
仲尾 健宏	工学研究科	右記の論文が国際的学術誌『Electrochemistry』にアクセプト(Online Published)された。 『Electrochemistry』は、日本の電気化学会(The Electrochemical Society of Japan)が発行する査読付き国際的学術誌で、主に電気化学の基礎および応用研究を対象としている。		【論文詳細】 "Mechanochemical Synthesis of Potassium-Ion Conductor K ₃ SbS ₄ " T. Nakao, C. Okushima, T. Kimura, A. Nasu, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi Electrochemistry, 93, 077005: 1-4 (2025). https://doi.org/10.5796/electrochemistry.25-00082 <u>Accepted: Jun. 22, Published online: Jun. 25</u>

朝倉 大智	工学研究科	右記の学会において行ったポスター発表(英語)が、優秀であると評価を受け「第19回固体イオニクスセミナー優秀ポスター賞」を受賞した。 ・発表題目「Improvement of Li Stripping and Plating Behavior Enabled by Insertion of Sn and In Interlayer between Li Metal Electrode and Li ₃ PS ₄ -LiI Electrolyte」 ・内容：全固体Li金属電池の短絡抑制に向けてLi/固体電解質界面にSnとInを挿入し、リチウムの溶解と析出挙動を評価した。	日本固体イオニクス学会 第19回固体イオニクスセミナー/ (2025/8/5-7)	【大会概要】 年に1回、固体イオニクスおよびその周辺分野の研究者や学生が一堂に会して、関連研究分野の基礎から最新の進展を 学びつつ、活発な議論を通じて新しい展開を模索することを目的とした全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：100人(一般:47人, 学生:53人)（口頭発表(招待・特別講演含む)16人、ポスター発表 66人） 発表数：ポスターセッション 66件 受賞者数：7名
河野 瑠美	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀学生賞」を受賞した。 ・標題「広範囲のPr数に適用可能なテイラー・クエット流れにおける熱伝達相関に対する数値解析」	化学工学会 第90年会 (2025/3/14)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、化学工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：1,000人程度 発表数：314件（ポスター発表） 受賞者数：発表の上位12%以内に授与される
高尾 侑花	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生奨励賞」を受賞した。 ・標題「難造粒性鉄鉱石の造粒特性と粉体レオロジーの関係」 ・発表内容：製鉄では湿式造粒による原料鉱石微粉体のサイズアップが肝要である。粒子が成長しにくい難造粒性鉄鉱石は易造粒性鉄鉱石を加えて造粒されるが、その添加条件は経験的に決定されてきた。本研究では、添加鉱石の粒度や割合が造粒特性に及ぼす影響を解明した。さらに、攪拌トルク測定から造粒特性を把握する方法論を提案した。	化学工学会第90年会/ (2025/3/12~14)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、化学工学および関連分野に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：約2,000人 発表数：76件（ポスターセッションD） 受賞者数：14名、うち学生奨励賞5名
巖 元志	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Award」を受賞した。 ・標題「Investigating compression properties of solid electrolyte powders for all-solid-state lithium-ion batteries」	10th International Conference on Discrete Element Methods (DEM10)/ (2025/7/1~4)	【大会概要】 2年に1回、産官学を問わず、粉体工学シミュレーションに関する研究成果の発表・議論を行う国際学会です。 【規模】 発表数：200件 受賞者数：20名
片山 可奈子	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生奨励賞」を受賞した。 ・標題「新規な小型流動層型ジェットミルの開発とその粉砕性能の評価」	化学工学会第90年会 (2025/3/12-14)	【大会概要】 年に2回、産官学を問わず、化学工学に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 対象となるポスター発表314件に対して、最優秀学生賞4件、優秀学生賞38件、学生奨励賞19件
今吉 優輔	工学研究科	一般社団法人 粉体工学会における「第1回 アシザワ粉体工学未来賞」を受賞した。 研究タイトル：「微視構造と破壊力学特性評価に基づいた粉体の高速圧縮成形メカニズムの解明」	粉体工学会	粉体プロセスに関する優れた研究を行っており、将来、粉体工学会での活躍と粉体工学の未来に貢献することが期待できる若手の研究者に贈られます。
大橋 歩実	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。 ・標題「両親媒性細孔を有するシクロデキストリン型金属有機構造体における薬物分子包摂挙動の数値解析」	第22回ホスト-ゲスト・超分子化学シンポジウム (2025/6/7-8)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、分子間相互作用に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 対象となるポスター発表110件に対して、優秀ポスター賞10件

尾崎 凌	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Young Researcher Award」を受賞した。 ・ 標題 “Oxide coating of cathode active material in all-solid-state batteries using spray drying method”	International Conference on the Characterization and Control of Interfaces for High Quality Advanced Materials (ICCCI) 2025 (2025/7/8-11)	【大会概要】 3年に1回、産官学を問わず、界面特性評価と制御技術に関する研究成果の発表・議論を行う国際学会です。 【規模】 対象となるポスター発表78件に対して、優秀ポスター賞21件
青木 瞭太	工学研究科	筆頭著者として以下の論文が掲載された。 R. Aoki, K.D. Hattori, T. Yamamoto, Revisit to the mechanism of quenching: Power effects for sonochemical reactions, Ultrasonics Sonochemistry, 120 (2025) 107419		【学術誌情報】 Ultrasonics Sonochemistry, Impact Factor 9.7
鶴保 温大	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀学生賞」を受賞した。 ・ 標題 「電極付近に生成した気泡周囲の流動に対する数値解析」	化学工学会 第90年会 (2025/3/14)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、化学工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：1,000人程度 発表数：314件（ポスター発表） 受賞者数：発表の上位12%以内に授与される
服部 冠志	工学研究科	筆頭著者として以下の2報の論文が掲載された。 K.D. Hattori, T. Yamamoto, Mass transfer of acoustic cavitation bubbles in multi-bubble environment, Ultrasonics Sonochemistry, 115 (2025) 107295 K.D. Hattori, T. Yamamoto, Stability analysis of the effect of harmonic waves on the shape stability of acoustic cavitation bubbles, 120 (2025) 107444		【学術誌情報】 Ultrasonics Sonochemistry, Impact Factor 9.7
井上 義文	工学研究科	以下の著名な国際学術誌へ第一著者として論文が掲載された。 Improvement of D-lactic acid production from methanol by metabolically engineered Komagataella phaffii via ultra-violet mutagenesis. Y. Inoue, K. Nakamura, R. Yamada, T. Matsumoto, H. Ogino, Metabolic engineering communications 20, e00262 (2025) https://doi.org/10.1016/j.mec.2025.e00262 掲載日：2025/5/17		Metabolic Engineering Communications CiteScore 13.3, 最大バーセントایل 93%（掲載時） Impact Factor 4.1
森 拓哉	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Presentation Award」を受賞した。 ・ 標題 「Investigation of dispersion behavior of Ni-Al LDH nanoparticles in solvents」 ・ 内容：高濃度ナノ粒子分散液の分散凝集挙動についての評価 ・ 評価を受けた点：研究内容、プレゼンテーション、質疑応答	International Conference on Nanospace Materials 2025 (ICNM6) (2025/7/29～2025/8/1)	【大会概要】 2年に1回、産官学を問わず、ナノスペース材料に関する研究成果の発表、議論を行う国際会議 【規模】 参加人数：126 人 発表数：108件（うち、ポスター発表52件） 受賞者数：8名
川原 隼人	工学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Presentation Awards for ICNM6」を受賞した。 標題 「Thermal transport properties of pillar-layered metal-organic frameworks impregnated with linear alkanes」	6th International Conference on Nanospace Materials/ (2025/8/1)	【大会概要】 2年に1回、ナノ空間材料に関する研究成果の発表、議論を行う、10カ国以上から研究者が参加する国際学会です。 【規模】 発表数：110件（ポスター発表含む）
友田 怜	工学研究科	カリフォルニア大学リバーサイド校との国際共同研究成果が化学系トップジャーナルであるAngewandte Chemie International Edition (Impact Factor: 16.9) に採択された(2024年11月19日 オンライン公開)。	Angewandte Chemie International Edition Volume 64, Issue 8, e202420243	タイトル：Distinctive photomechanical shape change of p-phenylenediacrylic acid dimethyl ester single crystals induced by a spatially heterogeneous photoreaction 著者：Daichi Kitagawa, Rei Tomoda , Sebastian A. Ramos, Gregory J. O. Beran, Christopher J. Bardeen, Seiya Kobatake DOI：10.1002/anie.202420243

天野 萌奈	工学研究科	国際的学術誌 (IF: 7.7, Top5%)へ論文が受理される等優れた功績があった。 ・ 標題「Excellent adsorption performance of sulfated yeast for heavy metal ions: High capacity and selectivity for rare earth elements」 ・ 著者名：Kokoro Yamada, Moena Amano , Yoshihiro Ojima, Hideki Azuma, Koichi Igarashi, Masayuki Azuma ・ 硫酸基修飾を加えた酵母への金属吸着機構の解析で優れた成果を導き出し、環境科学分野のトップジャーナル (Environmental Research)への論文投稿および受理に大きく貢献した。主な役割は研究実施、データの収集、整理、分析、投稿原稿の チェックなど。		論文名：Environmental Research (IF: 7.7, 98%パーセンタイル) 標題：Excellent adsorption performance of sulfated yeast for heavy metal ions: High capacity and selectivity for rare earth elements その他：本内容に関して2025年9月の日本生物工学会で口頭発表予定、別の化学修飾酵母の内容に関してもセカンドネームで投稿中の論文あり
窪田 舞	農学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生優秀発表賞」を受賞した。 ・ 標題「カンナビノイド受容体1を介したオレアミドによる筋管細胞の肥大機構」 ・ 内容：食品成分であるオレアミドがカンナビノイド受容体1を介して骨格筋の肥大を誘発する新たな分子機構に関する情報を提供した ・ 評価を受けた点：骨格筋の量と質の維持・増強のために新規の作用機構を介したオレアミドの活用の展開が期待される研究である。	第79回日本栄養・食糧学会大会 2025年5月24日	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、栄養と食糧の分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：2,000人 発表数：全体の演題数500件以上、このうち学生優秀発表賞選抜対象の演題数 137件 受賞者数：12名
松本 航紀	農学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。 ・ 標題「人工カルボニル還元酵素によるエナンチオ分岐型反応の構築」 ・ 内容： 貴金属を導入したタンパク質を利用するという新規性の高い手法によって立体選択的なケトン還元反応を触媒する酵素を構築した。 ・ 評価を受けた点：1) 研究に対して発表者が十分に寄与していること、2) 質疑応答に優れていること、3) 独自性が認められ、今後の発展が期待できること	第4回生命金属科学シンポジウム (2025/5/15～16)	【大会概要】 年に1回、生命金属科学に関して産学官の研究者が集まり研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：150人 発表数：58件（ポスター発表含む） 受賞者数：3名
三枝 直樹	農学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。 ・ 標題「人工金属リアーゼにおける基質配位様式の構造解析」 ・ 内容： 金属活性中心を動かすという新規性の高い手法によって立体選択的なマイケル付加反応を触媒する酵素を構築した。 ・ 評価を受けた点：1) 研究に対して発表者が十分に寄与していること、2) 質疑応答に優れていること、3) 独自性が認められ、今後の発展が期待できること	第34回金属の関与する生体関連反応シンポジウム (SRM2025) (2025/6/7～8)	【大会概要】 年に1回、生物無機化学に関して産学官の研究者が集まり研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：150人 発表数：51件（ポスター発表含む） 受賞者数：6名
福井 香音	農学研究科	右記の学会において行った発表が優れた内容であると評価を受け、JERA Award (Best Poster Presentation) を受賞した。 ・ 演題 "Establishment of transformation system that enables biomanufacturing in Euglena gracilis" ・ 従来、所属研究グループが2023年に発表していたユーグレナの安定核ゲノム形質転換系に潜在していた問題を、新たな特許技術により突破し、バイオものづくりに利用可能な遺伝子改変システムを実現したことが大きく評価された。 ・ なお、この発表のもととなった特許については、2025年1月に、当該学生と指導教員の共同発明として、大阪公立大学から特許を出願済みである。（特願2025-009199）	4th International Congress on Euglenoids (EIN2025)/ 40th Annual Meeting of Japan Euglena Research Association (2025/6/30-7/1)	【大会概要】 Euglenoidsに興味を持つ研究者の国際ネットワークEuglena International Network（2019年設立）の国際集会として、世界8か国からの講演者を得て開催した。本年度は、初めて日本で開催した。 【規模】 参加者数：139人、発表数：38件（ポスター発表含む） 受賞者数：4名、うちJERA Award 2名
川澄 留佳	農学研究科	右記の国際学会において行ったポスター発表で評価を受け、Graduate student travel awardを受賞。スポンサー企業のHUBBARD AGRICULTURAL SCIENCE社より賞金（5 0 0 USドル）+参加費（5 0 0 USドル）を授与された。	The 64th Annual Meetin of the Society of Nematologists, Victoria, British Columbia, Canada, July 13-17, 2025	【大会概要】 年に一回行われる線虫の国際学会。今年はカナダのビクトリア市で開催される世界規模の学会です。 【規模】 参加者数：250人 発表数：100件（ポスター発表含む） 受賞者数：20名程度、うち2位から20位の中の1名

木村 登陸	農学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ベストペーパー賞」を受賞した。 ・ 標題「大阪府の照葉樹が優占する社寺林における樹林の発達程度と α 多様性からみた自然性評価」 ・ 概要：大阪府内全域の照葉樹が優占する社寺林を対象に植生調査を実施し、樹林の発達程度に関する樹木の高さや胸高直径、個体密度、および種多様性に関する α 多様性（単位面積あたりの種数）の4つの観点から定量的に自然性評価を行うことによって、大阪府内で特に自然性が高い貴重な社寺林を明らかにした。	2025年度日本造園学会100周年記念全国大会/ (2025/5/18)	【大会概要】 年に1回、春季に開催される学会最大のイベントで、造園・ランドスケープ分野に関するあらゆる学術・技術に関する報告や研究成果を通して、議論・交流を行う全国規模の大会です。 参加者数：2025年度は1000名以上 発表数：30件（学術論文発表のみ） 受賞者数：4名
井岡 来斗	農学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手ポスター発表賞Presentation Awards for Young Scientists (PAYS, Poster)」を受賞した。 ・ 標題「Habitat and population dynamics of an alien praying mantis, <i>Hierodula chinensis</i> 」 ・ 内容：外来種ムネアカハラビロカマキリの行動特性を明らかにするため、2022年および2023年の9月から11月にかけて、週1回の直接目視観察を実施した。その結果、日没後は昼間に比べて活動が活発であることが明らかとなった。さらに、成虫期の個体群動態および移動を推定する目的で標識再捕獲調査とロードキル調査を行ったところ、再捕獲率が低く、路上捕獲率が高い傾向が認められた。これらの結果から、本種の雄は特定の季節に活発に移動する可能性が示唆された。	XXVII International Congress of Entomology (第27回国際昆虫学会議) (ICE2024) (2024/8/25~2024/8/30)	【大会概要】4年に一度、世界中のあらゆる分野の昆虫学者が集まる国際会議です。 【規模】 参加者数：4278人（82カ国） 発表数：2817件（ポスター発表含む） 受賞者数：非公開
松浦 匠	農学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手ポスター発表賞Presentation Awards for Young Scientists (PAYS, Poster)」を受賞した。 ・ 標題「Tending ants selectively prey on aphids with shorter proboscises: implication for the evolution of aphid proboscis length」 ・ 内容：長野県松本市において、クヌギ上に形成されたクヌギクチナガオアブラムシの7コロニーを対象に調査を行った。アリに捕獲・運搬されたアブラムシ個体を採取し、体サイズと口吻長を比較した。その結果、口吻が長い個体ほど師管液の吸収量および甘露分泌量が多いことが確認された。また、アリに捕食された個体は、同一の幹上に残存していた個体に比べて口吻が有意に短い傾向を示した。	XXVII International Congress of Entomology (第27回国際昆虫学会議) (ICE2024) (2024/8/25~2024/8/30)	【大会概要】4年に一度、世界中のあらゆる分野の昆虫学者が集まる国際会議です。 【規模】 参加者数：4278人（82カ国） 発表数：2817件（ポスター発表含む） 受賞者数：非公開
古木 秀明	看護学研究科	国際的な学術誌に複数の論文が掲載されるという、優れた功績があった。 特に、『Worldviews on evidence-based nursing 』は看護学分野における国際的なリーディングジャーナルの一つであり、『Japan Journal of Nursing Science 』は日本における看護学の代表的な学術誌として高く評価されている。 （論文1）Furuki H, Sonoda N, Morimoto A. Relationship between evidence-based practice knowledge and skills and evidence-based practice implementation in subgroups of professional and work-environment factors among hospital nurses: A cross-sectional study. Japan journal of nursing science, 22(4), e70018. https://doi.org/10.1111/jjns.70018 (IF：1.6) （論文2）Furuki H, Sonoda N, Morimoto A. Factors related to the knowledge and skills of evidence-based practice among hospital nurses: A cross-sectional study. Nursing Practice Today , 2025. (IF：1.0) （論文3）Sonoda N, Furuki H, Morimoto A. Impact of Environmental Noise on Inpatient Outcomes: A Scoping Review. Worldviews on evidence-based nursing . 2025 Aug;22(4):e70056. doi: 10.1111/wvn.70056. (IF：3.8)		
宇佐美 夕夏	生活科学研究科	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「トピックス賞」を受賞しました。 ・ 標題：「閉経後肥満モデルラットの肝臓ビタミンE濃度の低下機構」 ・ 内容：閉経後は女性ホルモンが減り、太りやすくなり生活習慣病の危険が高まる。本研究では、閉経後の状態を再現したラットを使い、ビタミンEの働きを調べた。その結果、太ると体のビタミンEが減り、酸化ストレスを抑えるため多く消費されることが示された。閉経後の女性には、病気を防ぐため十分なビタミンE摂取が大切であることが示唆された。 ・ 評価を受けた点：優れた研究内容であることが評価を受けた。	第79回 日本栄養・食糧学会大会 (2025/5/23~25)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、栄養・食糧科学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：2,500人 発表数：約500件 受賞者数：21件 https://www.jsnfs.or.jp/wp-content/uploads/HPtoppics-1.pdf

井上 陽晴	生活科学研究科	（１）右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した（2025/3/18）． ・表題「大腸菌における κ-CU線毛オペロンの遺伝学的分類」 （２）右記の学術誌において筆頭著者として論文を投稿し、受理・掲載された． ・表題「An Atypical Kappa-Class Chaperone-Usher Fimbriae of a Human Enterotoxigenic <i>Escherichia coli</i> Strain Shows Multi-Host Adherence and Distinct Phylogenetic Feature」	（１）第19回日本微生物ゲノム学会 （2025/3/17~3/19） （２） <i>Microbiology and Immunology</i> 2025. 69(5):270-279. doi: 10.1111/1348-0421.13208.	（１）【大会概要】年に1回、阪工物手方野におけるナノム研究に関する成果発表、議論を行う全国規模の学会です． 【規模】 参加者数：300人 発表ポスター数：63件 受賞者数：10名 優秀ポスター賞 https://www.omu.ac.jp/life/info/news/entry-17082.html https://smartconf.jp/content/sgmj25/program 論文 https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/1348-0421.13208
水谷 有紀子	生活科学研究科	博士前期課程において、以下の論文がImpact Factor付き英文国際誌に掲載された。 Yukiko Mizutani, Shigekazu Ukawa. A Systematic Review of the Association Between Pain and Instrumental Activities of Daily Living Disability in Community-Dwelling Older Adults. <i>Geriatrics</i> 2025, 10(5), 113; https://doi.org/10.3390/geriatrics10050113 （2025年8月21日にアクセプト） 内容と評価を受けた点：地域在住高齢者では痛みとIADL障害がともに高頻度でみられ、機能低下や要介護化につながる。両者の関連を明確化することは健康寿命延伸と介護予防の観点から重要とされる。本研究は、地域在住高齢者における痛みと手段的日常生活動作（IADL）障害の関連を明らかにすることを目的とした系統的レビューである。2025年7月にPubMedを検索し、60歳以上の地域在住高齢者を対象に痛みとIADL障害の関連を検討した英語論文を抽出した。400件の文献のうち29件が基準を満たし、そのうち23件（横断研究18件、コホート研究5件）は有意な関連を報告したが、6件は関連を認めなかった。痛みの評価方法やIADL尺度は多様であり、定量的統合は困難であった。全体として痛みはIADL障害の予測因子であるが、治療歴、多疾患、ポリファーマシーなどの交絡要因を十分に調整していない点や評価指標の標準化不足が課題であること、今後は統一かつ多面的な測定法を用いた研究やメタ解析が必要となるといった今後本領域において研究が必要な課題を明らかにした。		論文が掲載されたGeriatricsは、Impact Factor: 2.1, 5-Year Impact Factor: 2.5, Cite Score: 3.4をマークし、CiteScore category rankにおけるHealth (Social Science)ではQ2に位置する老年学分野では優れた雑誌である。
中路 怜	生活科学研究科	2024年度の卒業設計において特に優秀な作品を制作しており、日本全国から卒業設計を顕彰する展覧会の中でも最大級を誇る「せんだいデザインリーグ」（応募総数約700点）と「赤れんが卒業設計展」（応募総数約1200点）において100選に選出された。これら全国規模の卒業設計展の両方で選出される作品は極めて限られており、優秀な卒業設計だったことの証左である。このほかにも日本建築学会設計競技（近畿支部）にて表彰を受けるなど活発な設計活動を行っており、他の学生の模範となっているため、本表彰に応募する次第である。	せんだいデザインリーグ100選 （2025年3月9日） 赤れんが卒業設計展100選 （2025年3月27日）	【せんだいデザインリーグ】 「せんだいデザインリーグ卒業設計日本一決定戦」は、全国の建築デザインや、都市計画などを学ぶ学生の卒業設計作品を仙台の地に集め、審査によって「日本一」を決める大会であり、今年度で23回を数える国内最大級の卒業設計展である。 https://gakuseikaigi.com/nihon1/25/100%E9%81%B8/ 【赤れんが卒業設計展】 「赤れんが卒業設計展」は建築学生による卒業設計作品を集め、展示・公開審査を行う全国公募制のイベントであり、今年度で19回を数える。 https://www.akarengadiploma.com/

金 隼泳	生活科学研究科	日本建築学会は会員数3万6千人を超える国内最大級の学会であり、毎年度、全国の大学院生を対象に修士論文の表彰制度を設けている。候補者は、第三十五回の優秀修士論文賞を受賞した。応募総数85編から特に優秀な修士論文15編が選出された。 当該学生は本表彰のほかにも特に優秀な研究活動を展開しており（日本建築学会技術報告集1編と国際会議論文1編を公刊済）、他の学生の模範となっているため、本表彰に応募する次第である。	日本建築学会優秀修士論文賞他 (2024年8月・日本建築学会大会)	【日本建築学会優秀修士論文賞】 日本建築学会は会員数3万5千人を超える国内最大級の学会であり、毎年度、全国の大学院生を対象に広く募集し、特に優秀な修士論文を表彰している。応募総数85編から特に優秀な修士論文15編を選出 https://www.aij.or.jp/jpn/sotsuron/pdf/sotu2024.pdf 【その他研究業績】 ・「郊外住宅地化にともなう伝統的な町並みの景観変容」（『日本建築学会技術報告集』2025 年 31 巻 78 号 p. 987-992）https://doi.org/10.3130/aijt.31.987 ・The Earliest Residential Area Planning Based on the Neighborhood Unit Theory in Postwar Japan International Planning History Society Proceedings vol.20, 2024.7（査読有）https://journals.open.tudelft.nl/iphs/article/view/7637
中島 壮汰	生活科学研究科	Journal of Transport & Health（IF：3.3）に学術論文が掲載された。当該論文は高水準のIF論文誌に掲載されただけでなく、被引用Top10％論文にも該当しており、当該研究分野において注目される研究成果だと考えられる。候補者の卒業論文（指導教員：加登遼）を査読付の国際学術論文に公刊した模範的な取り組みであり、本表彰に応募する次第である。	Journal of Transport & Health (2025年3月掲載)	Journal of Transport & Health Volume 41, March 2025, 102011 Effects of demand-responsive transport on daily waking steps in Senboku New-Town: A cohort study using propensity score matching https://doi.org/10.1016/j.jth.2025.102011

